

国立病院機構和歌山病院での実習を終えて



三栖 有紗

和歌山病院で実習させて頂いて、特に印象的だったことは二つあります。

まず一つ目は、結核病棟を見学させて頂いたことです。かつては日本人の死因第一位であった結核も、抗菌薬、ワクチンの普及や生活水準の向上などによって、死亡者数は激減しました。そのため、結核は少し前までは古い病気であるように思われていましたが、近年になって、毎年二万人が新たに結核を発症し、約二千人が結核で亡くなっているようです。結核は現代において無視できない感染症となっています。私は、和歌山病院で実習するまで結核というと、空気感染により容易に周囲に広まり、感染すると喀血し、死に至る恐ろしい病気であるというイメージを持っていました。そのため、実習で結核病棟を見学すると聞いた時には、いくら病棟が陰圧で、N95 マスクを装着していたとしても、もしかしたら感染するのではないか、という不安を覚えずにはいられませんでした。しかし、病棟見学の前に副院長の駿田先生の結核についての講義を聞いて、その心配はすぐさま払拭されました。実際のところ結核菌は弱毒性で、感染者の 90%は発症しません。医療者が N95 マスクを、患者が外科用マスクを装着し、咳エチケットを行えていれば、感染のリスクはほぼ抑えられるのだと学びました。講義ののち結核病棟に足を運んだところ、入院患者さんに会うことはできませんでしたが、N95 マスクを装着して陰圧室の仕組みを実際に目で見ることができ、結核という病気に対する理解が正しく深まったように思います。この実習を通して、自分が結核について間違ったイメージを持っていたことを恥じるとともに、今後は医療者として正しい病気の知識を身に付けることの重要性を切に感じました。

印象的だったこと二つ目は、院長の南方先生による胸部 X 線画像の読影セミナーです。このセミナーでは、いかに自分が日々頭を使って考えることをしてこなかったかが分かり、反省させられました。考えてみれば当たり前のことですが、画像の白黒には一つ一つ理由があります。なぜ画像が白いのか、黒いのかを考えることで X 線の異常所見が見えてくる、という読影方法を論理的に教えて頂きました。X 線画像の読み方は教えて頂きましたが、この先臨床の場で読影できるようになるかは、今後の自分の努力次第であると思うので、臨床現場で学ぶ中で日々研鑽を積みたいと思います。

最後になりましたが、一泊二日、実質丸一日という短い間でしたが、南方先生をはじめ、国立病院機構和歌山病院の皆様にはご指導いただき、誠にありがとうございました。和歌山病院で学んだことを今後のポリクリ、研修に生かし、頑張っ参りたいと思います。